

目的 女子高校生の私服素材は綿デニム製品が比較的多く、その製品はデニム織物として代表されるジーパンを始め、スカート、上衣等と広範囲に所持しており縫製教材としてもデニム織物を持参する生徒が多い。デニム製品の洗濯方法は電気洗濯機使用が90%以上で、ファッションテーマ・ボロルックの影響もあり、ノーアイロンで着用しているが洗濯後の形態変化を訴える生徒が比較的多く、要因として糸かす製品に任するまでの潜在力が母体となり洗濯時の取扱い方により収縮として表われるものと推察できる。そこで洗濯条件を一定にした洗濯機種間の相違による収縮率について次の事項を検討した。

方法 綿デニムの原布及びその加工布(洗絨・防縮加工)を試料としてTIS L 1042 F-ス法に準拠して、収縮試験を洗濯機4機種を使用して、機種間の有意差を統計的手法により考察を試みた。

結果 試験結果から機種間の異なるD機をのぞき、原布のデータのバラッキおよび平均値の有意差は認められぬ。

加工布についてはデータのバラッキによる有意差は認められぬが平均値において有意差が認められることがわかった。以上のことから収縮率は試料の種類によつて洗濯機種の影響をうけやすいことがわかり、本試験の場合は洗濯機の仕様の差、即ち作用の差は原布には影響が小さいが、加工布に対してはそのまま収縮率の平均値に有意差となつて表面化したものと思われる。洗濯機の影響は試料に関係があり、加工布のように物理的影響を受けやすいもの程洗濯機の規格の相違が現われるものと推測される。